

いくさやぶれにければ、熊谷次郎直実、「平家の君達たすけ舟に乗らんと、汀の方へぞおち給ふらむ。あっぱれ、よからう大將軍に組まばや」とて、磯の方へ歩まするところに、練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形うったる甲の緒締め、黄金づくりの太刀を佩き、切斑の矢負ひ、滋藤の弓もって、連銭葦毛なる馬に黄覆輪の鞍おいて乗ったる武者一騎、沖なる舟に目をかけて、海へざっとうちいれ、五六段ばかり泳がせたるを、熊谷、「あはれ大將軍とこそ見参らせ候へ。まさなうも敵にうしろを見せさせ給ふものかな。かへさせ給へ」と扇をあげてまねきければ、招かれてとってかへす。汀にうち上がらんとするところに、おしならべてむずと組んでどうど落ち、とって押さへて頸をかかんと甲をおしあふのけて見ければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かね黒なり。わが子の小次郎が齡ほどにて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしともおぼえず。「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ。名のらせ給へ。たすけ参らせん」と申せば、「汝は誰ぞ」と問ひ給ふ。「物その者で候はねども、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のり申す。「さては、汝にあうては名のるまじいぞ。汝がためにはよい敵ぞ。名のらずとも頸をとって人に問へ。見知らうずるぞ」とそのたまひける。

熊谷、「あっぱれ、大將軍や。この人一人討ち奉ったりとも、負くべきいくさに勝つべきやうもなし。また討ち奉らずとも、勝つべきいくさに負くる事もよもあらじ。小次郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しくこそ思ふに、この殿の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆き給はんずらん。あはれたすけ奉らばや」と思ひて、うしろをきつと見ければ、土肥、梶原五十騎ばかりでつづいたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、「たすけ参らせんとは存じ候へども、御方の軍兵雲霞のごとく候ふ。よものがれさせ給はじ。人手にかけ参らせんより、同じくは直実が手にかかけ参らせて、後の御孝養をこそ仕り候はめ」と申しければ、「ただとくとく頸をとれ」とそのたまひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども、

平家は戦さに敗れた。熊谷次郎直実は「平家の君達がたすけ舟に乗ろうと、水際の方に逃げるだろう。ああ、身分の高い大將軍と一対一で組み合いたい」と言っ、磯の方へ馬を進めているところに、練貫に鶴の刺繍をした直垂に、萌黄匂の鎧を着て、鍬形うった甲の緒を締め、黄金づくりの太刀を腰に差し、切斑の矢を負い、滋藤の弓を持って、連銭葦毛の馬に黄覆輪の鞍おいて乗っている武者が一騎、沖にいる舟を目掛けて、海にざっと馬を乗り入れ、岸から55～66メートルぐらい馬を泳がせているので、熊谷は「おお、大將軍とお見受けした。卑怯にも敵にうしろをお見せになるか。お戻りください」と扇をあげてまねいたところ、その武者は招かれて戻ってくる。水際に上がろうとするところで、馬を並べてむずと組んでどつと共に落ち、取って押さえて頸を斬ろうと甲を押し上げて見ると、年齢16～17歳ぐらいの若者が、薄化粧して、お歯黒をつけている。わが子の小次郎と同じ年ごろで、顔かたちがとても美しかったので、どこに刀を突き立てればいいのかわからない。

「そもそもどなたでいらっしゃいますか。お名前を聞かせてください。お助けしましょう」と言うと、「おまえは誰か」とお尋ねになる。「名のるほどの者ではございませんが、武蔵国住人、熊谷次郎直実」と名のつた。「では、おまえには名のるまい。おまえのためにはよい敵ぞ。名のらぬが頸をとって人に尋ねよ。わたしを知るものもいるだろう」とおっしゃった。

熊谷は、「ああ、大將軍だ。この人一人をたとえ討ち取ったとしても、負けるはずの戦さに勝てるはずもない。たとえ討ち取らなくても、勝つはずの戦さに負けることはよもやあるまい。息子の小次郎がちょっとしたけがをしても、おれは胸が苦しくなったのだ、この殿の父は、息子が討たれたと聞いて、どれほどお嘆きになるだろうか。なんとかしてお助けしたい」と思って、うしろをキツと見たところ、土肥、梶原が五十騎ぐらいでつづいてくる。熊谷は涙をおさへて、「お助けしたいとは思いますが、源氏の軍勢が雲霞のごとく群がっています。もう逃れるすべはないでしょう。他人に斬らせるよりも、同じことならわが手で斬って、後のご供養をいたしましょう」と言ったところ、「さあ早く頸を斬れ」とおっしゃった。熊谷はあまりに気の毒でどこに刀を立てればいいのかわからない、目の前が暗くなりなにも考えられなくなってしまい、前後不覚におちいったが、いつまでもそうしているわけにもいかないので、

さてでもあるべき事ならねば、泣く泣く頸をぞかいてんげる。「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生れずは、何とてかかるうき目をばみるべき。なさけなうも討ち奉るものかな」とかきくどき、袖を顔におしあててさめざめとぞ泣きゐたる。やや久しうあって、さてでもあるべきならねば、鎧直垂をとって頸をつつまんとしけるに、錦の袋に入れたる笛をぞ腰にさされたる。「あないとほし、この暁、城のうちにて管絃し給ひつるは、この人々にておはしけり。当時みかたに東国の勢何万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」とて、九郎御曹司の見参に入れたりければ、これを見る人涙をながさずといふ事なし。

後に聞けば、修理大夫経盛の子息に大夫敦盛とて、生年十七にぞなられける。それよりしてこそ熊谷が発心の思ひはすすみけれ。件の笛はおほち忠盛笛の上手にて、鳥羽院より賜はられたりけるとぞきこえし。経盛相伝せられたりしを、敦盛器量たるによって、もたれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。狂言綺語の理といひながら、遂に讚仏乗の因となるこそあはれなれ。

泣く泣く頸を斬ったのだった。「ああ、弓矢をとる身ほど情けないものはない。武芸の家に生れていなければ、このようなつらい目にあわずにすんだのに。おれは非情にも討ち取ってしまった」と泣き言をいい、袖を顔に押し当ててさめざめと泣いていた。しばらくして、そうもしてられないので、鎧直垂をとって頸を包もうとすると、錦の袋に入れている笛を腰に差していた。「ああ、気の毒なことだ、今日の明け方、城郭の中で演奏しておられたのは、この方々だったのだ。今、味方に東国の軍勢が何万騎いようが、戦さの陣へ笛を持つてくる人はまさかないだろう。貴族の子息は優美だなあ」と思って、九郎御曹司にお見せしたところ、これを見る人で涙を流さない人はいなかった。

あとで聞くと、修理大夫経盛の子息、大夫敦盛とって、17歳であった。このことがあって熊谷の発心の思ひは強くなった。くだんの笛は、祖父の忠盛が笛の名手で、鳥羽院から拝領したと伝えられている。経盛が相伝なされたものを、敦盛が笛の名手だったので、所持していたという。笛の名を小枝さえだと叫ぶ。狂言綺語とされる管弦の遊びに用いる笛ではあるが、熊谷直実を仏の教えに導いたのは貴いことである。